大野が首をのばした。

『わかつた〳〵、大いにやる。君等も國家の爲めに大いにやつてくれい、といつて握手をしたところが、連中、入つて來た時の恐ろしい顏が惠比壽顏に變つた。海軍の青年將校が鈴木內閣と見透しをつけて居る位だから、海軍出身の齋藤さんは噂だけに過ぎないぢやないか』

『それは緣起がいゝ。どうも大野さんの前だが、陸軍の青年將校は不謹愼やな。何ぼ士官候補生いふたかて陸軍は陸軍や、それ等がわが黨の總裁を殺しをつたのに、この機逸すべからずとばかり、平野內閣ぢやと……二階に居る毛利力まで引づり込まれちよる、何ちうこつちや。そこへ行くと海軍の方は、大臣が、軍人は政治に關與すべからずちうお布令を出して居る。尤も現役海軍軍人が主役をつとめとつたといふこともあるが、兎も角謹愼の意を表さう、ちう精神はえゝ。あれでなくちやあかん。けふ來た將校も憲政が暴力によつて破壞されちやあかんちう建前を知つとる』

井上は、一流の關西辯でまくし立てた。

『ハ……都合の好い方にばかり取り居るナ。鈴木內閣を是認した點はいゝが、注文をつけに來よつた點は立派な政治關與ぢやないか……海軍も陸軍も、政治の現狀に不滿な點は同じぢ

や。鈴木內閣でひとつ、積極進取の政治をやるんぢやナ。君等もいそがしくなつて結構ぢや。及ばず乍ら吾輩も、陸軍上層部との聯絡は忘りなくとつて進ぜよう』

『時に、二階はいやにしんねりむつゝりと靜かにねばつとる。閣僚の詮衡から、政務官、祕書官の取り定めとなれや、何しろ大政黨だから、時間もかゝらうといふものだ、どれ、一寸樣子を見て來よう』

橋野は、やがてはかういふ風にして首相官邸の閣議室へ入つて行くのだ、と思ふと胸がわく〳〵するのであつた。

二階では、鈴木、鳥山、毛利の三人が、茶器の散らばつた紫檀の大机を中にをいて、まれに見る緊張を示してゐる。

『……ぢや君は政友會を見離して軍閥官僚と握手するといふのかネ、毛利君』

さういふ鈴木の手は、膝の上で、震えてゐる。思ふに、十二時半から、一時半まで、一時間といふものこの論が續けられたらしい。

『鈴木さん』

と言つたが、毛利は改めて、

『總裁！』

と叫ぶやうに呼んだ。

『僕も毛利作太郎の息子です。官僚や軍閥の爲めに、親父がどんな苦しい思ひをしたか、よく知つてゐる積りです。失禮ですけれども貴方のやうに、役人の秀才として官界の順風に帆を上げ、必要に迫られて政黨に入られた心境とは根本的な違ひがあります。

『それだから言ふのだよ。毛利作太郎翁といへば日本政黨史上の重要人物、その御親父に仕込まれた君が、今日に及んで、軍の若い者達と手を握つて、官僚の本尊を立てゝやらうといふのだから話がわからなくなる。君のいふ通り、僕などは中途からの政黨員だ、だから君などこそ、僕等を引づつて、政黨政治の爲めに闘つてくれるべき筈と思ふのだ』

『政黨員が、徒らに大臣や役人になりたがるこの根性が、政黨の末期現象を代表してゐる第三期症狀です。これにメスを入れなければ元も子も無くしてしまふ。今がメスの入れ時です。潮時は丁度好い。手遲れになれば足腰が起たなくなつてしまふ。休業して入院する時だ。兎も角、明日の代議士會は取り止めるやうに指令をお出しなさい。一時の感情に支配されて、力もない者が力の有り餘る者にぶつかつて行くといふのは此上もない愚擧です。入院する前

に絶命してしまふ』

『代議士會は、時局がデリケートだから、といふ理由で取止めさすことにしても可いが、君もこんな考へだと、超然内閣出現拒否に、わが黨の威力が半減されてしまふ。も一度考へ直して見てくれたまへ。實は、昨日君の方の清水に土屋、川崎が來てゝ君の椅子に就ても懇談したのだ。今更ら離反されては困つてしまふ』

『僕の椅子のこと？　あれはハツキリ言つてをきますが、僕の意志ではない、僕の方の政黨員さへがあゝいふ眞似をする。だから叩き直さなければならんといふのです』

この時、沈默を破つた鳥山和郎は始めて口を切つた。

『あれは君の意志ぢやないのか。あれを總裁から聞いて、僕は僕で、君に内務の椅子を譲り、ゴルフでもやらうといふ風に、一人で定めてゐたのだ』

『ハ……鳥山、それや又有難い話だ。が、僕は君を押しのけて、鈴木内閣の内務大臣になるやうなことは、恐らくお互の生きてゐる中にはあるまい』

皮肉ではない。深い咏嘆が毛利の胸に在つた。鳥山は、毛利は矢張り、デマの如き野心をもつ者でなかつたと思つた。そして新らしい親しさが湧いた。

然し乍ら、親兄弟と雖も山へ登らうといふ者と、海へ行かうといふ者に話しの合ふことはなかつた。片方は山へ行かねば健康が恢復せぬと考へる。片方は海へ入らなければ駄目だと思ふ。海の方は目の前にひろがつてゐる。山の方は途が嶮しく複雑である。

『總裁。僕は決して貴下を裏切る者でもなければ政黨を捨てて軍人官僚の使用人になるものでもないのですよ。僕を信じて、この際は、平野内閣の副總裁で我慢する決心をつけて下さい。でないと、政友會それ自體が世帶が持てなくなる丈です。それのみか、貴下自身が立枯れになります』

毛利のヅケ〳〵言ふ無遠慮さに、鈴木は心中甚だ面白くない。然し持前の『馬鹿』を爆發すべく、餘りに彼は毛利に押されてゐた。

『僕と平野とは司法畑の舊い友人だ。平野が政權をとつてから頼まれゝば否とは言へまい。が既に超然内閣絶對反對の旗を出してある……』

『それがいけないんです。それだと萬が一、齋藤が出てもきつと援助する樣になる。引づられたんぢや駄目です。引づるんでなくつちや。總裁？　僕は引きづつてゐるんですよ……』

鳥山は、鈴木よりも毛利よりも彈力性を有つてゐる。毛利のやうに、金と手間をかけて積

極的に情報を蒐めてはゐないが一種のカンで一種の見透しをつける特有な神經をもつてゐた。

『民政黨から、聯立の使が來た。今朝三井文吉がやつて來たんだ。勿論お話しにならぬといつて斷つたが、然し齋藤でも出て、全るつきり搔つ拂はれるよりは、聯立の方がマシぢやないか』

『聯立も絶對反對の聲明がしてある……今更屈する譯にも行くまい』

これは深い吐息の間に洩す鈴木の言であつた。

『鳥山！　その考へが災ひするんだよ。夜店のバナゝぢやあるまいし、一體何度呼びが下落してゐるんだ。單獨内閣から、人材吸收、聯立反對から聯立オーライ。この次はたとへ超然齋藤でも足輕草履とりに成り下るのは知れてゐる。一體貴樣は認識不足だ』

お前、貴樣が出る時は、この兩人の心が底の底まで解け合つてゐる時であつた。が今夜はそれには、その逆傾向があつた。それを見て取つた鈴木はさすがにハラ〳〵して爆音を食ひ止めやうとした。

『おい〳〵君達は兄弟喧嘩を始めて老寄りを手古摺らす積りかい。見つともない、止せ〳〵。俺は政權を取り逃しても君等兄弟をにがしたくないぜ。この方が餘程欲が深いだらうアハハ

ハ』

「俺」といふ一人稱にまで、故意に碎けた鈴木の冗談は然し、彼の善人、單純、從つて强さうでもろい性格の肚からの本音である、と先づ觀取したのは毛利である。思はずその眞實にうたれた。

『鳥山！　喧嘩は止さう、親父が泣く』

『止してねるか、お前も思ひつめすぎる。一ねむりして來いよ。僕も眠い。又明日の事にしませう、鈴木さん』

鳥山の動議に對しては、もう誰も異議はなかつた。

苦蟲を潰した樣な顏をして毛利が先づ下に降りた。そこに待つてゐる大野に目を注いだ毛利は肚の中で舌打ちした。

『大野君、君の方の中心はとうの昔に外れてしまつたね。總裁は甘くて人がいゝんだから、泣かさん樣にして呉れ』

と言つた儘、その返答に耳をかさうともせず、草履をつゝかけて出て行つた。

七

凶變後、十日間の難航を經て出來上つた政權は、齋藤內閣であつた。鈴木も毛利も、鳥山も各々の思惑はガラリと外れたのである。そして、新內閣に閣員を送つた大政黨は、全く餌に吠えるヤセ犬と化した。今まで、憲政の常道を唱へてゐた新聞といふ新聞は、ケロリとそれを忘れ、木鐸を叩いて、元老の頭の好さをたゝへた。

新しい書記官長と事務引つぎを濟ませた夜、毛利は田川の大廣間に、淸水や、土屋など一黨十數名といつしよに、澤山の藝妓に取繞かれてゐた。

『さあ、みんな飲め。首途の祝ひだ。お互の世界はいよ〳〵これからだぞ。いよ〳〵、俺の天下が近づいて來た。……徹底的に踏みつけられて、初めて眞個の强い力が湧いて來るのだ……』

毛利が、何時に似ず、醉つて饒舌である。おつるは眉をひそめた。先生は疲れ過ぎていらつしやると思ひながら、そつとその側へ行つた。

『先生。失禮して少しお休みになつたら如何でございます』

毛利は、キット目を見ひらいた。

『心配するな、おつる。醉つて愚痴をいふとでも思つてゐるんだらう。馬鹿な。末だそれ程やきは廻つちやゐない』

『でも先生。毎晩の睡眠不足でゐらつしやるんですから』

『心配するな。みんなが、あんなに好い氣持に醉つぱらゐやないか。おつる、杉との相談な、けふ杉と具體的に話を進めた。も少し待つとれ』

おつるは、止なく座を外した。襖の外へ出ると、そつとハンケチを出して目頭の熱いものを拭つた。(終)

政治小說

壞れた椅子

——(森恪なき政友會は斯くして分裂しそして解黨した)——

1

前野米作と島野利夫は仲よくないといふ評判であつた。それはとも角として、前野が島野の自宅を訪ねたといふ話は誰も聞いてゐなかつた。その前野が、總裁問題が起つてから頻々と島野の自宅訪問を始めたのである。

自分の自動車は二丁も離れた所へおいて、彼は今日も午後四時から島野の家の奥の間にゐる。

『……で此の情勢では、小島君までが鳥山總裁案に贊成し兼ねない』

前野は平常の冷靜さを失なつたかと疑はれるほど熱を帶び、その眼はらん〳〵と蛇のやう

に光つてゐた。

『そんなに神經質になることはあるまい』

島野は何時もの輕い、人をからかふ癖を出した。

『大勢が鳥山ならそれも良い。水は自然に流れる方向に流さにや無理が出來る』

『併し小島君は新黨をやるならやるで、尙さら新黨反對の鳥山に取られてはならない。ね、島野君、實は小島君を總裁にと考へるのだ。君が口を切つて總裁決定のイニシアチーブをとつて貰ひたいのだ』

『小島をか？　それや……もつと年功と修練を積ませにや、大政友會の總裁には無理だよ』

『そこなんだ。君の云ふ通り、もつと修練を要する。それには大臣を辭めて黨へ歸るのだ』

島野の頭にはピンと響くものがあつた。小島が鐵道大臣を辭めると、四人の總裁代行委員の中から補充するのが順序だ。すると自分は先づ第一に數へられる候補者である。

『大臣を辭める？……なるほど、それが小島の將來を生かす所以かも知れん。何と云つても金の强味が土臺だから、彼奴も大きうなれやう』

前野は島野が注文にはまりかけたのを、蛇のやうな眼で見のがさなかつた。

『そこだ、小島君の後は、僕から近衛さんによく諒解を得る積りだ』

主義主張の代りに大臣慾と能辯とを持つてゐる島野利夫は、かくの如くして手もなく前野米作の糸にかゝつた。

『ところで君は鳥山と民政黨の松田の陰謀を知つてるだらうね』

前野は島野が寢返へる癖のあるのを知つてゐた。押えつけてをかねばならぬ。

『何だい、陰謀とは大それた……』

島野は、また釣り手にかゝる。

『聯立內閣の陰謀だよ、矢垣大將を擔いで、かれの下での政民聯繫內閣さ。民政黨の主流が鳥山の總裁を實現したいのはこゝなんだ。それを機會に、君や僕をオミットする計畫なんだ』

『馬鹿な？』

島野は云つた。

『オミットされちゃ叶はん』呻るやうにつけ足した。

『此の際は近衛內閣の改造に、こつちが加はつてをることだ。改造は近いらしいよ。小島君

が總裁となつて黨へ歸れば、君と僕は揃つて入閣出來るかも知れん』

『鳥山の總裁は斷然いかん！』

島野はもう動かしやうもなく、前野の術中のものであつた。

2

鳥山太郎が齋藤内閣の文部大臣を辭してから内閣は目まぐるしく代つた。代る度に社會情勢は右へ右へと廻つて行つた。それに正比例して政黨の存在と力とは蠟燭のやうに細つて行つた。政黨内閣の夢はつい五六年の間に、遠い昔の物語りになつてゐるのであつた。從つて政黨の總裁が政權の王座に立つことなどは考へられないのみか、總裁であるばかりに却つて内閣にも入れぬといふ政治情勢にさへ變つてゐた。いま迄は政黨に驅使されてゐた官僚と稱せられる人々が、主人公の老衰につけこんで屋臺骨まで乘取るやうな情勢がます〳〵深刻になつて行つた。

さうした情勢に拍車をかけたのは、支那事變であつた。軍部の必要に應じて官僚が莫大な豫算を組んだ。戰爭に必要な爲めには、極端な統制時代が待つてをり、國家總動員法といふ

獨裁法さへ議會を通過した。政黨は、内心泣き乍らもそれを承認することによつて、時代的なテロの迫害から逃がれることが可能であり、僅かに議會政治の附屬品としての殘骸を保つことが出來るのであつた。

鳥山が、その半歲の外遊からこの火のやうな日本へ歸つて來た時は、丁度第七十三議會で、滅びゆく政黨が、新らしい時代の波に押されて惱む末期現象を露呈してゐる最中であつた。

昭和十二年七月七日に、あの蘆溝橋事件が起きて、それが世界戰爭以上の戰野を擴める支那事變にまで發展した。鳥山が神戸から歐洲航路の船に乘つたのは、それから二十日經つ七月の二十七日であつた。近衞首相にも廣田外相にも會つて、事變の見極めを訊いたけれど、極めて樂觀的に響いたし、當の陸軍さへが、現地解決で全面戰爭にまで擴大せぬ、させぬ、と見透しをつけてゐたのであつた。それで安心した彼は、三十年前に死んだハーバード大學出身の父親から、くれ〴〵も云はれてゐた、世界を視て來いといふ遺言の實行と、行詰つた政黨政治の新しき展開方策を求めて、故國を後にしたのであつた。

その當時、既に近衞内閣の鐵道大臣をしてゐた、同じ政友會の總裁代行委員の一人であり、鳥山が弟のやうにしてゐる小島竹平は、世間の思惑もある、餘り暢氣さうに映るから、是非

洋行は中止するやうにと勸告した。そこには兄に對するやうな、親切がこもつてゐた。

島野利夫は、洋行するもいゝが、君の留守中は黨の事は一切われ〳〵に委せて、後で文句は云はぬか、假令總裁が定まつても差支へないか、と彼一流の辯護士的な念を押した。そこには威嚇に類するものがひそんでゐた。鳥山は、一切君達に委せる、と言質を與へ、裸身になつた氣持で建直しの旅に出た。

小島は、鳥山が自分の忠告を容れないのが不服であつた。けれど彼が平常の我儘を通して旅立つと定めてしまつてからは、何やかやと注意をしたり、留守中の相談に乘つたりした。鳥山かドイツで、ライン地方の自動車旅行中本國の政府から國民使節になつて欲しいといふ電報を受け取つたが、それも閣僚としての小島が鳥山の旅行を遊びごとでなく印象づけるためにたてた案であることを、彼は後に知つた。小島が代行委員の一人でゐる以上、彼は安心して留守が出來ると思つたのである。

鳥山は歸朝しても餘り議會へは顏を出さなかつた。三人の代行委員と、幹事長の杉田に委せておけばいゝし、遊んで歸つて途中から出しやばるのが遠慮されもした。議會はどうせ政府の提案を通すより外に行き方はあるまい。政友會が二派に分れて、時局派と反對派と爭つ

ても、結局は大勢に勝てまい、と見透しをつけてゐた。たゞその後に來るべき政治的潮流を如何に處置すべきか、それを歐米の情勢と照し合せて考へることに、この新歸朝者の心構へはあつた。首相の近衞と共に、國民使節の報告と、今後の政治情勢、事變の解決策等に就て語つたのが主な仕事で、餘は專ら思索と、持ち歸つた支那に關する洋書を讀むことに日を費やした。

無力以下に墜ちた政黨が、時代の力で有力以上に伸びた强者から、ホールド・アップされてゐる間に、議會はあらゆる時代的な獨裁法をさらつて行つた。その議會での經驗で、四人の代行制では、統制が保てないことが黨員に分つた。專任の總裁を置かねば、といふ氣運は、だん〳〵政友會の中の輿論となつて行つた。新黨運動の行詰り、政變說等が、その動機となり拍車となつた。世間からみれば死んだやうな政黨ではあつたが、內輪の者から見れば確かに生きてゐるのであつた。

3

山の手の電車通りから一丁ほど坂道を上つた鳥山邸の書齋から洩れてくる電燈は明るく、

陽氣な高笑ひが聞えてゐた。前野と島野が島野の家で鳥山排撃の方針を決めた翌晩のことである。鳥山派の邁進居士と並び稱される、安東純一と岡野高彦が鳥山と鼎座してゐた。

『昨夜島野と話した。鳥山君より他にあるまい、と僕が云ふと、先生、黨の大勢に照して僕がいゝのを推薦するよ、と胸を叩いて見せた』

これは安東である。岡野はそれを承けて、

『何でもイニシアチーブをとりさへすれば奴は滿足なんだ。人の好い先生だからね。自分でならうといふほど、向ふ見ずではなし、前野は前野で鳥山は嫌ひだが、扨て正面から立候補して戰ふ勇氣はないし、小島君は新黨ばかり考へてゐるからな』

岡野も安東も好人物で一本調子の正直者で裏がない點は同類項であつた。鳥山は半ば澁り半ば快心の笑を湛えてゐた。

『皆で推してくれゝば、裸身になつてもやるより仕方がない。一身の都合ばかり考へてゐる譯には行くまい。だが皆が推してくれればだよ』

『皆と云ふ譯には行かんぞ、三土にも色氣はあるし九原も無罪になつてゐるし、前野や小島の新黨派だつて少しはゴテるし、中には酒手稼ぎもあるしね』

と岡野である。

『公選で行くがいゝ。田中總裁を立てる時に定めた七年制の公選規則がある』

安東は提案した。

『ウム、公選はいゝな。鈴木さんを總裁にする時も公選を建前にして勝つたね。あれは森の智慧だつた。……彼奴が生きてをればよかつたな』

鳥山はふと死んだ森恪の元氣のいゝ姿を浮べた。森は犬養内閣で森内閣と謂はれるほど、力のある書記官長であつた。あの五・一五事件の嵐の夜、既に犬養の次の總裁を鈴木友三郎にしやうと文部大臣の鳥山に旨をふくめた。彼は公選論を表看板とする一面、疾風の如く黨の大半以上を制した、大勢には抗し得ぬと見た岡崎邦輔、望月圭介など床次支持の長老が仲裁役を買つて出ることによつて、讓つた床次の面目を立て、公選の形を略し擧黨一致の形で鈴木を總裁に仕上げたのだつた。

案内もなくドアを排して杉田龜平が入つて來た。杉田は死んだ野田大槐の女婿で、古い政友會員である。鳥山派の陣營と云ふよりも、彼は彼で一派をもつてゐた。

『や、お揃ひで勇ましいね』

杉田は誰へとなく聲をかけながら、肥つた體をソファへ埋めた。

『實は君を待つてゐた』

鳥山は、この參謀に相談しなければ定らぬものを持つてゐた。鳥山が開け放しなのに對して、杉田は趣味と云つてもよいくらゐ、秘密愛好癖を持つてゐることを知つてゐる先客二人は、氣を利かせて歸つて行つた。

『杉田、僕も決心してやるよ。三土も芳澤も大勢には重んぜられてゐないやうだし、代行の中で僕の對立候補たるべき前野に立候補する意志がない。島野や小島は勿論、僕を支持してゐるとすれば、斷然やるより仕方がない。外國で靜かに考へた消極的な考へと、歸つて來て渦中に投じた感じとは違はざるを得ない』

鳥山の快活な語調に對して杉田は純重なくらゐ愼重である。九州辯は標準語よりもかういふ場合には重々しさがあつた。

『無論、やらにやいかんたい、ほつておけば新黨の足場に使はれるのがオチぢや。時に島野と小島がこつちのもんちう證據があるかナ。僕も探りを入れとるが、まだ掴めん。前野が島野をどげん操りをるかちうところに疑問がある。必ずしも君の云ふちよるやうな樂觀もしち

やをれんたい』

『いや小島君なら大丈夫だ。鈴木さんが在任中のことだつたが、兩人で懇談したことがある。つまり、次は僕がやる、その次に小島がやる。と斯ういふ諒解が出來てゐる』

『さうならいゝが、併し、その當時はあれは新黨運動に走つちやをらんだつたけん、情勢が異ふとるぞ。君はいつでも觀察と情報が甘いので足許をさらはれるけん、餘程愼重にはこばにや』

鳥山は、江戸ッ子の長所と缺點とを遺憾なく兼ね具えてゐる。人を信じ易く、熱し易かつた。カッと熱中したかと思つてゐると、何時の間にか冷めてサラリとした氣持になつてゐた。これに反して杉田は熊本人の持つねばりと聰明さを兼ね具えてゐた。なか〳〵人を信じもしないし、熱中もしなかつた。がせまい乍らも、一度ついた人は離れなくなる魅力があつた。鳥山は死んだ森恪の役割をこの杉田に期待してゐるのであつた。

『島野は君で異存あるまい。ない、と僕も見たが、他の二人がどうも疑問だ』

杉田ほどの情報蒐集家で用心深い男ではあつたが、前野と島野の密議は未だ入つてゐなかつたのだ。たゞ鳥山に對して深刻な怨恨を、復讐心を抱く前野が、金に依つて增大してきた

小島の勢力をどう使ひこなすかが、疑問であり心配であつた。

4

島野が獨自の意見として、總裁就任の決意を促しに行く前に、前野は島野に知れぬやうに、小島を訪ねてゐた。島野が來て、斯ふ云ふ筈になつてゐるから、是非承諾するやうにとあらかじめ勸めておいた。島野を使つたのが自分である、そのことを小島に知らせてをかなくては、一石二鳥主義の彼の算盤はたゝなかつた、小嶋はなか〳〵腰をあげなかつた。小島は踏み切りの惡い、決斷の鈍い牛のやうな男であつた。自分は近衞公を黨首とする新政黨を二年このかた待ち續けて來てゐる。そのためには今持つてゐる全財產はおろか、これから先きも、軍用飛行機製作と、新しく初めた北海道の金山とから滾々として湧き出でる財力を、政治運動に注ぎこんでも惜しくないと思つた。

五十五の今日まで獨身で通して來た小島は子孫に美田を殘す必要もなく、身のまわりにも、その收入の割合からすれば幾らも要らなかつた。だから金持に似ず恬淡で我利々々なところがなかつた。

『物を欲しがるのが人間失敗の元だ』

といふ哲學を持つてゐた。事實、彼は骨董もいぢらなければ、先輩政治家の書を床にかけるでもなかつた。賴まれて書畫などを買はせられゝば、直ぐ人に與れてしまつた。その一面あり餘る金は無雜作に振りまいた。が併し彼自身の意識下には、どの金持にも共通した權力慾と名譽心があつた。大臣になることは、國政に寄與する仕事として、彼の所謂「慾」の中には入つてゐなかつたし、時到らば一黨の首領となつて、宰相の地位に上らうといふことも亦「慾」ではなかつた。

自分で貯めた三百圓の金を持つて群馬の田舍を飛び出し、海軍機關學校に入つて、それから飛行機に着目して米國へ渡つた。職工生活から叩き上げて立派なエンヂニヤになつた、といふのが彼の成功美談のそも〳〵であつた。水呑百姓の子が大臣宰相になることはまこに大したことであるけれども、それは慾を超越した犧牲であるとさへ考へられた。自分は金の力で政界に地位を得てゐる。それを百も承知してゐた。最後は金が勝つのだとも悟つてゐた。政友會では大臣の登龍門と謂はれる幹事長の經驗もない。また議會で重要なポストとされる豫算委員長もつとめたことがない。まして、稅關とも云ふべき幹事といふ走使ひの役もつと

めず大臣となり、總裁候補にまでのし上げた原因は金の力であつた。

併し、金を云はれることが實はさうであるが故に尙さら痛痒を感じる。金も金だが、人物が、といふ評判を獲得しなければ一人前ではない、さういふ考へ方に捉はれた彼は、前野が内報に來た時、直感的に、鳥山を擊つために自分の金を利用するのだと感じた。

島野が鐵道大臣官舍へ小島を訪ねた時、二人の間には次のやうな會話が取り交された。

『新政黨を作らねば時局の擔當は出來ない。他人が馬鹿と云はうが諦めが悪いと評さうが、僕は斷念しない。だから政友會にこだわつてゐる時ではないと思ふ』

『そこだ！　新黨の必要は前野も僕も大いに認める。浪の荒い時に古いボロ船で沖へ出やうとすれば、溺死するだけだ。是非とも新しい船を造らにやならん。造る爲めには政友會といふ鐵骨をそのまゝ使ふのが近道だ。鳥山一派のやうに、政友會そのものを强化しやうなどは、もはやお伽噺だよ。船長になつとれば船は何處の港へでも入れられる。新黨をやる爲めにも君が總裁になるのが萬全の策だ』

島野の論理は内容の如何に拘らず、形は整つてゐた。

『新黨の前提として總裁になることは必ずしも鳥山を排斥することぢやない。あれ等も今に必ず隨いて來る。だから君が總裁になることは、今あれ等を憤慨さすかも知れんが、一年先きには感謝になつてお釣りが來る。置いてきぼりを喰つて溺死するよりはどのくらゐ幸か判りやせん』

『それはさうだ。鳥山君も、先へ行けばそれが判る』

小島は、鳥山を出し抜くのではないといふ理由を發見したやうに思つた。小島の心は百二三十度がたの轉回を示してゐた。

『總裁の任期七年は永すぎますね。あれは三年か四年に改めていいですよ』

『長い？　長いものは縮めれば可い。四年位にするかね、小島君』

小島はそれに直接は返答しなかつた。

『島野さん、半年か一年なら僕が預かつても可い』

『有難い、半年か一年で新黨の目鼻もつかうと云ふものだ。丁度いゝ。それでいゝ。有難う小島君、これで政友會も沈没せずに濟む』

『で、鳥山君には貴下から話してくれますね』

『鳥山に？あゝ鳥山に……然るべくわたりをつけるから君は何もいはんがいゝ。一切知らん顔でゐてくれたまへ』

島野は近來になく上機嫌で、鐵道大臣官舍を出て行つた。

支那事變を中心とする國際政局の大いなる動き、國内政局の不安、さういふ中で歌を忘れた政黨の總裁の椅子の爭奪が、彼等黨員にとつて支那事變よりも大きく影響することに對して嘲笑を送るのは、人間の本質を知らぬ者である。人は、對岸の大火災よりも、隣家の小火により大きな關心を持つ。近衞内閣の總辭職か改造か、といふ空氣が漂ふ時には、次の内閣に閣僚政務官として入れるか、または改造内閣から電話がかゝるであらうかの淡い期待に生きるのが、今日の政黨人であつた。

世評を裏切つて、改造近衞内閣の首班者は政黨を完全に無視した。從つて前野も大いに不平であつた。島野は、公卿は人情を知らぬから駄目だ、と憤慨した。内閣の改造をあてにして出發した前野と島野の小島總裁擁立運動は、併し今更中止する譯にも行かなかた。

第一回代行委員會は、芝公園の三緣亭といふ原敬以來馴染みの西洋風な建物の中で開かれた。震災の被害を受けない此の古い建物の二階の窓からは、山内の青葉が晴れた五月空の下で

若々しく微風にそよいでゐるのが見えた。

午後三時といふ定刻には、鳥山、前野、島野、小島の四人が、その室の眞中に置かれた古風な丸卓子を圍んで澁茶に咽喉をうるほしてゐた。島野は例の漫談調を用ひて、いよ〳〵會議に入る前の空氣を和らげやうと力めた。鳥山は小島にむかつて、改造後の内閣の樣子を訊いてゐた。前野一人が近眼鏡の奥から細い目を窓外にやつてゐる。

『そろ〳〵始めやう』島野が議長氣どりで云つた。

『島野君に進行して貰はう』

鳥山が答へた。島野は黨の幹部會でも必ず座長をつとめる。そのために、わざ〳〵彼一人特別に大きな威嚴のある椅子を運びこませて、其處に掛けるをことにしてゐた。代行委員會でも議長と進行係とを併せ勤めるのは彼であつた。

『どうぞ、島野君』

前野は斯ういふ時に限つて鳥山に贊成した。

『然るべく進行して下さい』

小島が最後に云つた。これで事實上、總裁決定のイニシアチーブをとる者は島野といふこ

とになつた。彼は内閣改造に對する不平を忘れて、愉快な氣持になつてゐた。

總裁は代行委員の中より出すこと、任期七年を四年に短縮することを決めてから、いよいよ本論に入つた。

『次期總裁には、黨内外の情勢に鑑みて、小島君に御苦勞願ひたいと思ふ』

島野の提案は鳥山にとつては、正に爆彈である。自分を推すものと信じ切つてゐた彼は、瞬間やられたと感じた。併し、昂ぶる感情と、發言すべき言葉を整理する爲めに、努めて微笑することを忘れなかつた。當の小島は泰然と落ち着いてゐる。前野は視線を窓から島野に移した。

『島野君の提議に贊成する』

と態度をはつきりした。

『鳥山君、御意見は？』

と島野は促した。この時既に鳥山の腹は定まつてゐた。

『僕は公選を建前とするが、先づ小島君當人の意見をきかう』

小島は肥滿した體軀に不釣合な細い聲で考へる時間もなくキツパリ言つた。

『自分は總裁の器ではないが、諸君の御考へが一致するならば、引き受けて一年ぐらゐの間黨を預りませう』

小島までが卽座に引受けるといふからには、前もつて、三人が一致して企んだ陰謀であることが鳥山にも判つた。

『鳥山君の御意見は？』

島野はいやに叮嚀に改まつた調子で重ねて訊いた。

『その返事は今日はしない。小島君と兩人で話した上で意見を云ふ。たゞ僕は飽く迄公選を主張することに變りはないから御承知を願ひたい』

とキツパリ言つて小島の方へむいた。

『小島君、明日の朝十時頃にはお訪ねしたいが、御都合は？』

『午前中は宅にをります。何卒おいで下さい』

前野は鳥山の公選論を腹の中で嘲笑した。鈴木を總裁にする時、森恪の筋書による公選の主張は表看板で、裏には腕力と金力を控えてゐた。彼のためには決死の勇を振ふ旗本代議士二三十名を「箸」のやうに自在に使ひこなして床次派をいぢめつけた。公選すれば床次が負

ける情勢が見えたから單一化が出來たのだ。鳥山はあの時の蒸返しをやらうとしてゐるが、「箸」の大部分は金の力とはいへ小島を支持してゐる。鳥山の陣營には「箸」がないではないか。公選論をふりまはす彼自身が、往年の床次竹二郎であることに氣がついてゐない。

前野は陰謀策士に共通な細い眼でニヤリと笑つた。

『今日の會合の內容は一切秘密といふことに申合せて散會したい』

島野は提案した。三人を一人で土俵の外へ押し出す陰謀を秘密にしようとは虫がいゝ、と思つたが鳥山は別に異も樹てなかつた。

6

前野と舊い交際のある總務の伊藤は幹事長の砂山重太郎とも仲のいゝ間柄であつた。彼は今朝早く前野に呼ばれて小島への使を賴まれたのである。その使を果して歸りに黨の本部に立寄つて砂山に耳うちをした。今日の委員會で小島總裁が決定するだらうと告げた。砂山は、そんなことがあるものか、もしあれば幹事長の自分が知らぬのに、君が知つてる譯はない、と最初は一笑に附したが、だん〳〵話を堀り下げて行くと間違ひないことが判つた。

『君を幹事長に推したのは前野さんだといふことを忘れるなよ。岡野を推した鳥山なんぞと心中なんかしないやうに、友達甲斐に忠告に來たのだ』

伊藤はさう云つて歸つて行つた。

『畜生！　てつきり前野の陰謀だ。自分を幹事長に推薦したことを恩に着せて、俺を味方にしようとしてゐやがる。糞！　誰が……』

さういつた言葉で、彼は憤慨してゐた。

委員會から歸りの鳥山の自動軍は三田綱町にある杉田の門に滑りこんだ。鳥山から代行委員會の樣子を逐一聽いた杉田はいつになく憤つた。

『よし島野の奴、面の皮をむいてやる。あのくらゐ平常何でも俺に相談してゐる癖に、事前に一言も云はんちうのは餘りにも人をなめとる。秘密にせいもくそもあるか？』

ことの決定に重要な役割を持つ砂山と杉田が憤慨するほど、相手の手まはしは早かつた。

が末だ、手は一つ殘されてゐた。鳥山が小島を訪ねて、小島を引かす餘地があるかも知れぬことであつた。その翌朝、小島の家で二人の間には次のやうな意味の會話が交された。

『鳥山さん、貴方はもう一、二年、潮のさして來るまで默つて遊んでゐる方がよくはありませ

んか。なるほど、私を推す連中の中には、蔭では悪口を云ひ乍ら金だけはちやんと取りに來る者が多い。それも知つてゐます。私自身についた勢力ではない、反鳥山の聯合勢だといふことも辨まへてゐます。實を云ふと私も最初はやる積りはなかつた。けれども貴方にも大切なら私にも大切な政友會、それが貴方の總裁だと誤解を受けて持ち切れないから、私が犧牲になる決心をしたのです。』

『僕で黨がもたないと云ふのは、軍部や近衞君と悪いからだといふ宣傳は聽いてゐる。よしそれが本當であつたとしても他力本願の政黨なら在存理由はない。人の顏色ばかり見てゐるやうな政黨に難局を切りぬける力はない。貴方は新黨に熱心だが、僕に云はせると自已をしつかり摑んでゐない者に全體主義も何もないのですよ。今日以上に迎合的な政黨は、寧ろ國の害虫だ。時代的な新黨が生れ出でるとしたら、下から盛り上つてくるのでなければ意味をなさぬし力もない。お互、さういふ意味では新黨をやる資格はない。今日流行の新黨といふのは草履取りだ。物欲し相にウロウロ政友會の後方攪亂をやつてゐる昭和會崩れだとか、立枯れの國民同盟だとか、便乘一本鎗の東方會だとか、ルンペンを集めたところで何にもなりはしない。それよりも筋の通つた家柄の古い伊藤公以來の政友會を建直す方が遙かに國の爲

になります』

『建直せるものならそれに越したことはないが、もう建直しの時期はおくれた。貴方はよく森君のことを云ふが、森君は犬養さんの時に三百四名といふ殆ど一國一黨に近い數を獲て一時は我が事なりと喜んだが、直ぐに水ぶくれで駄目だと、失望したぢやありませんか、だから建直しの時期はおくれたといふのです。貴方はいま伊藤公のことを云はれたが、伊藤公は當時各方面に散つてゐた新鮮有力な人材を集め、自由黨を改造して新しい政友會を創立した。今日は四十年前の伊藤公を必要とする。それには……』

『それには近衞君と云ふのが貴方の目標なんだが、第一、近衞君は絶對に出ない。僕も歸朝した當時、三時間ばかり話して見たが脈はない。よし起つても近衞君では、既成人物のかき集め以上のことは出來ない。ムツソリニーやヒツトラの新興勢力とはなり得ない』

『近衞さんが駄目と見限るのは氣が早い。私には諦められぬ理由があるんです』

『おや、貴方は政友會を新黨の土臺に使はうといふのですね。それや不可ぬ。まるで安く買ひ取つて高く賣る商賣だ』

『併し結局さうしなければ元も子もなくなつてしまふ』

『迎合政黨を作つたところで泡のやうなものだ。御用がなくなれば直ぐ捨てられる。政黨は軍需品ではない。今はそれが流行かも知れないが、流行品は薄つぺらで駄目だ』

『要するに見解の相違だから仕方がない……當面の問題として、私は貴方に讓つて頂きたい。貴方に敵の多い大きな原因の一つは、政治資金の不足で連中をうるほせないところから來てゐる。充分な資金を持つて悠々自適し乍ら、明日の大鳥山を築くことが黨の爲めであり、貴方の爲めだと思ふ』

『資金がなくて借金ばかりあるのは全く困るが、これも致し方はない。金だけで政治は出來もしますまい』

『貴方が暫く悠々自適する積りになれば、その間の入り用はどうにでもなりますよ』

『お志は有難いが、さう云ふ譯にも行きますまいね』

鳥山が小島邸を辭する玄關には、新聞記者と寫眞班が群がつてゐた。秘密を守る約束は鳥山が破つた。と思ふと、小島はいま迄になく鳥山を憎む氣持が出て、新聞記者が何を聞いても返事もしなかつた。

鳥山は何か寂莫たるものが胸の中にあつた。丁度、外遊の船が地中海にさしかゝつた時、

ある一人の舊い政友が死んだといふ電報を受取つた、あの時の氣持と似てゐた。自分の弟だとばかり思ひこんでゐた小島が、今では假面をかなぐり捨てゝ起ち上つたのだ。いま迄兄分として奉られて來たのは、自分の政治的地位と幅とを利用する爲めにしか過ぎなかつたのかも知れないと思はれた。と云つて未だに小島を憎む氣にはなれない。だから、君とならフエイヤな氣持で爭へると云つた。僕が公選で負けたら小島總裁の下に忠實なる黨員として働くとも云つた。が併し、それでは割り切れぬ今の氣持である。

小島が政治資金を出すから悠々としてゐろといふことをにほはせたのは、對立候補を買收するあの手ではないにしても、弱點を握ぎられ踏み付けられたといふ感情は消えなかつた。今迄は小島を信頼してゐたからこそ、政治資金の融通も頼んだ。自分の輩下の代議士で金に困る者があれば、よく小島の所へ頼んでもやつた。小島はその頼みを拒絶したことはなかつた。あれも自分の勢力をやがて奪ひ取る一つの手段でなかつたとは云ひ切れない。

今度の陰謀は、なるほど前野の筋書に違ひないとしても、今迄の情誼を重んずる小島ならば、假令新黨を作る主義の上からかねての話し合ひを捨てゝ自分を出し拔くまでも、事前に一言ぐらゐ諒解を求めに來さうなものである。

鳥山邸でその歸りを待つてゐた杉田に小島との話の内容を話した時、杉田は、

『新黨ちうのは、ステーブル・フアイバーたい』

と簡單に止めを刺したが、併し鳥山の胸の奥にはさう簡單に片附けてしまへぬ何物かゞあつた。流行を逐はず、今は時代おくれと人のいふ政黨政治論などを振りまわしてゐたなら次々と脱黨者が出て、現在の百七十人が或は三四十人の小さい政黨になつてしまふかも知れない。現に一部では、鳥山は革新クラブの犬養になると云つてゐる。

捨身になつて持ちこたへさへすれば、やがて犬養が大政友會に復活したやうな運命がまわつて來ないとは限らぬ。併しその捨身と貧乏世帶のやりくりが並大抵のことではない。自分の派には、犬養系の金ではうごかぬ人が多い。その他にも純樸な人々があるけれど、揃つて金には緣が遠い。總裁になつたとしても既に小島と對立してしまつた以上、その日から黨費は勿論、雜多な政治資金のやりくりを自分が一切しなければならぬ。

政治的發言權を喪失した政黨に對して投資しやうといふものはなくなつてゐる。それのみか、財閥を脅かして、政黨へ金を出すべからず、とふれ歩いてゐる者さへある。そんなこともあつて自分はこの一年の間、總裁にならうといふ氣がなかつた。

けれど戰ひは始まつてしまつた。戰ひは勝たねばならぬ。勝つて後、どんな戰利品を得るか、それを考へてゐる暇はない。政黨政友會の將來がどうなるか、どうすべきか、それは後で考へるとして、とも角支那事變に於ける日本の立場のやうに勝たねばならなかつた。

彼はその財政を掌る妻の保子に、ある金額の工面を命じた時、

『戰爭で公債はふえる一方だ。大藏省も急がしいぞ』

と强いて笑つて見せた。

7

鳥山の主張した公選論は通つた。表向きに論難しやうはなかつたからである。公選すれば鳥山のものといふ空氣が强かつた。それは前野の最も恐れるところであつた。だから、鳥山を叩きつける爲めには、鳥山に缺けてゐる金力を總動員するより外に途はなかつた。金の効力を人氣に勝たす爲めには、選擧期日をなるべく延ばして、その間に工作をしなければならぬ、と前野は考へた。前野の祕策は島野の口から提議された。期日は公選決定の日から二週間の間を置いて、その月の廿日と定つた。

かくして、鳥山、小島兩派の抗爭は日一日と劇しくなつて行つた。代議士、貴族院議員、代議員と呼ばれる人々三百二名が規定の選擧權を持つてゐた。けれども代議士連が名乘りをあげた選擧と異つて、選擧運動費の制限もなければ、戸別訪問、誘惑等に關する罰則もなかつた。投票の樣式は單記無記名とあるだけで、投票場をどうするとか、投票用紙は何を用ひるとかに就ては、全然抽象であつた。爭ふ者の勢力が五分と五分なら、結局金を使へる方が勝つのが何れの選擧にも常例であり、總裁選擧に例外のある譯はなかつた。

候補者を單一化せよといふ要望はあつた。第三者を立てろといふ妥協案もあつた。けれども長老といはれる人々の中には油揚げをさらはうとねらふ者があり、中立派の中には決選最終の一票の値上りを見てゐる者もあつた。どの新聞の報道を見ても分裂の危機にまで走るより外に途はないといふ風な觀測が專ら行はれてゐた。

が、併し一方和平の機運は底の方に動きかけてゐた。幹事長の砂山は、一旦は、島野、前野に對する反感から鳥山を勝たせやうと決心したが、靜かに考へて見ると、自分の在任中に黨が分裂して葬式を出すやうなことは不名譽であつた。

鳥山の參謀長杉田は、もと〳〵愛黨以外の理論はなく、たゞ歷史ある政友會の分裂は自分

の家を燒かれるに等しかつた。島野も亦黨あつての自分で、自分が黨を作つたり、首領になる柄でないことを知つてゐる上に、前野に煽てられた時の情勢はもろくも變つてゐた。內閣の改造は終了して大臣の椅子に空きが出來さうもなし、小島の樣子を見てゐると、總裁になつても黨に歸る積りは微塵もないらしかつたし、それに黨を紛糾させた者は島野だと云ふので、惡評は鳥山、小島兩派の間に等しく擴大されてゐた。もともと深い考へや信念の持合せはなく、明日は明日の風に吹かれる建前の彼は、自分の身を守る爲めにも次第々々に和平の方法を探してゐた。

前野は前野で三土孝助や河村松治などといふ總裁の野心ある「長老」の間を駈け廻つた。小島を應援することが、鳥山を斷念さす捷徑である。鳥山がまづ斷念すれば、黨の平和を保つ上から喧嘩兩成敗の形をとり、小島は自分の手で引かせる。だから小島の爲めに先づ盡力して欲しい、と理窟をもちまわつた。兩人をひつこませれば從つて第三者の長老が單一候補として登場する可能性がある。それを前野は匂はせた。前野は只だ一途に鳥山の勢力を擊破したかつた。それの爲めには後輩の小島を「總裁」と呼ぶ苦痛を忍ばねばならぬと覺悟して、島野を抱き込んだのであるが、實は小島でなくともよかつた。寧ろ小島でない方が好都合で

もあつた。

だから三土でも、河村でも自分の云ふことを容れて、鳥山反對の人物なら少しも構はない。たゞ、自分が出ることは困るのであつた。數百萬の財力を、何時利がのるか判らぬ政治に投ずることは、粒苦辛々横田千之助の玄關番から今日を築き上げた彼の最も苦痛とするところであつた。

前野が何故かくも深刻に鳥山を恨んでゐるか、それには遠い原因があつた。

田中將軍が組閣の大命を拜し、鳥山がその書記官長に内定した。前野は結局は法制局長官になつたのであつたが、最初鳥山は、松本丞治と云ふ黨外の法學者を田中將軍と相談した。折惡しく松本は關西へ旅行してゐたので交渉に時間がかゝつた。その間に前野は鳥山の案をかぎつけた。さる長老を口説いて、田中將軍に談判させ、危ふく司法省の政務次官に落されるのを免かれた。

また犬養内閣の時に最初森恪が大臣の候補になつてゐたが前野はリストにのつてゐるなかつた。伊東巳代治といふ樞密院の老人から犬養へ直談判させて危地を脱した。それもこれも皆鳥山と森の仕業である、と思ひ込んでゐた。森の生存中はその力に押されて前野の智慧もほ

どこしやうがなかつた。森が亡くなつた時から、鳥山は前野の智慧の目標になつてゐた。鳥山に兄事してゐる小島を、鳥山から引き離すために人知れぬ智謀と苦慮を重ねて來た數年間であつた。

8

砂山幹事長が代行委員會の席上で候補者單一を要望してゐる。

『小島さんは大臣、前野さんは參議、ともに國内の相剋摩擦緩和を旗印とする内閣の樞機に參畫しておいでになるし、島野さんは、この騷ぎを引き起した陰謀の張本で……』

ついロが滑つた。

『陰謀とは何だ、失敬ぢやないか。一代行委員が秘密の申合せを破つたからこんなことになつたのぢやないか！』

島野はぷり〳〵憤つて鳥山の責任を言外にほのめかした。かうなると闘爭では議會の中でも有數の定評ある砂山は面白くさへなつてゐた。

『三人の代行委員だけが知つてをり、他の一人の代行は勿論、幹事長にさへ知らせず、それ

が陰謀でないと仰言るか。それなら證據を御目にかけませう』

凄いことを云ふ時に、人はよく物靜かに叮嚀な言ひ方をする。砂山は議會の質問演說でもよくこの手を用ひた。伊藤のことを云はうとしたのである。島野は默つてしまつた。前野は横をむいた。餘韻を殘して攻擊を打ち切つた砂山はなほも選擧執行の不可能を强調して、若しどうしても選擧をやると云ふなら、幹事長は責任が負へぬから辭職するとまで云つた。

『砂山君、君の意の在るところは判つた。充分尊重するからもう一日待つて頂きたい』

獨り默りこくつてゐた小島が重い口を開いた。小島は閣議後の午餐會で二三の閣僚から煽て半分に冷やかされて來た。それが大臣を辭めてから爭へ、といふ皮肉にも聞えた。近衞首相は一言も言はなかつたが、言はなければ言はれぬだけになほこたへる。

世間は金が人を叩いてゐると評判した。運動費だといつて金をとりに來る人達の見え透いた醜惡さを見るにつけても、金だけが物を云ふのだと反省する寂しさがひそんでゐた。勢ひに驅られてこゝまで來は來たものゝ、扨て勝つたところでそれがどうなる、金で勝つたと云はれるだけである。

『幹事長が辭めると云ふなら、吾々代行委員も責任をとらなければなるまい』

『辭めん。眼の黑い中は斷じて辭めん！』

と云ひ放つたのは島野であつた。鳥山、小島、砂山の三人は島野の權幕を見て思はず吹き出したが、前野は兩腕を組んだまゝ一言も發しなかつた。

鳥山派の參謀長杉田と、小島派の參謀長前野の自宅へ、長老の大川平吉から電話のかゝつたのはその夜であつた。和平の仲介の勞をとりたいから明朝來てくれ、と云ふのであつた。大川はこゝが潮時と見たのであらう。前野は直ぐに島野へ電話をかけ、自分は風邪をひいて熱があるから君が行つてくれ、と賴んだ。杉田と面と向ふのは何となく氣がさしたし、つまらぬ言質も取られたくなかつた。

島野は出しやばる所があれば地獄へでも出掛けて行く人物であつたので、勿論卽座に承知した。

老巧な大川老人の打つた手はたしかに潮に乘つてゐた。島野と杉田はあれ以來、始めて顏を合せるのであつた。合せて見ると古い友達だけに、面の皮をむいてやる氣にもなれなかつた。大川は丁度兩人の氣持を和げ接近させるだけの役割をつとめたのであつた。大川が云ふともなく、訪問者の兩人が考へるともなく、候補者を單一化するにはどちらかを總裁にして

どちらかを副總裁にすることが出來さへすれば最上の策だつた。
『君、僕と一緒に三緣亭へ行つてくれ。兩人で梶をとらうぢやないか』
島野の誘ひは力足らざる者の助命願ひである。

9

鳥山は、杉田が決選とり止め運動に乘り出したことが不平であつた。けれど一切を杉田に委せてゐるやうな彼と彼の陣營の實狀では不平だからと云つて、どうしやうもなかつた。
『候補者單一問題に就て、小島君は昨日、一日考へると云つたが、その考へが纏まつたんですか?』
鳥山は先づ昨日の結論を訊いた。
『どうもね、と角出先は强硬で、中央の威令が行はれない時代ですからね』
小島は笑ひにまぎらせて、自分はとも角、擔いでゐるが一味が和平が肯んじないことを仄めかした。
『どつちか總裁、どつちか副總裁の籤をひいてはどうかな。』

島野の態度は昨日より遙かに碎けてゐた。
『と云つて鳥山君が小島君の下で副總裁はやれんたい』
杉田は例の九州辯を出して空氣を和げる役に立たせた。
『思ひ切り三土君でも立てたらどうだらう』
前野が突如第三候補を持出した。杉田はこれが曲者だと思つた。
『二人で纏まらんものを三人にしたら、尙さら纏まらんたい。それよりも、鳥山、小島の兩君が膝つき合せて話したら何とかなるぢやろ。あつちの室へ行つて話してみんか』
杉田の提案には前野が警戒した、二人だけで話し合つたら鳥山總裁、小島副總裁と話合ひがつくに定つてゐると觀たからである。
『そんなことをしなくとも、皆で話した方がいゝ。三人よれば文珠の智慧、五人なら、もつといゝ智慧は多く出やう』
と水をさした。話は同じところをぐる〳〵と空まわりするだけであつたが、和平を望む氣分は誰の顏にも讀めた。
『全部、白紙にかへすとするか』

午前十時から夜の十時まで、もう十二時間も續けてゐるこの會合だつた。島野から云ひ出した時には、誰も、もう異を樹てる策と根氣がなかつた。

公選の期日延期、兩候補者引分けが、かくして決められた。砂山幹事長を招んで新聞に發表する聲明書を、島野が起草する段取りに入つた時、その中に入れる文句の注文を、小島がつけた。「四代行は渾然一致」と云ふ文句である。そして出來上つた聲明は結論に云ふ。

『……總裁決定の必要なることは、毫も變るところなく、この點に關しては從來の結ぼれ、行きがかり等は全面的に一掃し、且つ四代行は渾然一致してその促進に努力することを申し合せ……』云々。

疲れた人々が三緣亭の坂を下りる頃は、もう夏の夜の帳は深く降りてゐた。

杉田は鳥山の車に同乘して、自分の車をその後へつけさせた。

『君は島野の面の皮をひんむいてやると言つてゐたくせに、いやに軟化したぢやないか』

鳥山の不平はなか〳〵納まらなかつた。彼は自分が勝つと信じて疑はなかつたからである。

『ぢやがのう鳥山、僕の計算では勝つても五票ぢや。その五票が金で買はれんちう保證はつかん。五萬圓づつで買つても、たつた廿五萬圓使ひ足しをするだけぢや。小島にすれば蚤に

食はれたほどにも感じまい。よし金には勝つても分裂ぢや。こんな馬鹿な話はなかたい。先へ延ばしておけばまた打つ手もある。戰はこれからぢや』

選擧の神樣といはれる杉田にも、恐ろしいものは金であつた。

『安東や岡野がいきり立つてゐる。僕も君も毆られるかも知れないぞ』

鳥山は自分の不平から、安東や岡野その他、手辨當で働いてくれた若い人達の憤懣が思ひやられた。

『僕が謝罪りにまわるから心配せんがえゝ』

事實杉田が自宅へ歸つたのは、夏の夜も明け方の四時であつた。それまで、强硬な人々の自宅や飲んでゐる場所を探して說得して歩いたのであつた。

同じ三緣亭の玄關から出る小島の車には前野が同乘してゐた。

『小島さん』前野は、君といはずにさんといふ。その聲は媚態にも近い女性的なものであつた。

『戰はこれからですよ。期間が長びけば長びくほど、こつちの勝味が增すといふものです』

『僕は最初、諸君が皆同じ意見だと感違ひしてゐたのです。でなければ、あんな馬鹿な目に

あはなくて濟んだ……』

小島は額る不平である。前野の手は餘りにもこみすぎてゐたと思はれた。

『併し決選の蓋をあければ、必ず勝つてゐる。それだけ鳥山の勢が貴方の下になつた譯ですからね』

『僕は鳥山君の考へ方には反對だが、鳥山君その人を憎む氣にはなれませんね。貴方とは出發點が違ふやうだ』

といつてから暫くして、

『前野さん、今日も陸軍大臣から報告を聽いたが、戰爭は案外長びきますよ。黨内の勢力爭ひをやつてゐる時ではない。これ以上もう爭ひたくない』

『黨爭をやめる。やめる爲めには貴方が總裁になつて勢力を單一化する……』

『一層、貴方がおやりなさい。それが順當ですよ』

『……冗談を……』

といつたきり、前野は默つてしまつた。

使はれる時より外に、用はないといつた存在の島野利夫は、誰も誘ひ手がないので、獨り

で三緣亭の坂を降りた。何處へ行かうといふあてもなかつた。

森恪は生き居る

昭和十六年五月十五日印刷
昭和十六年五月二十日發行

定價貳圓

著者　山浦貫一　大森區久ケ原一、一〇五
發行者　高野好生　神田區小川町二ノ一〇
印刷者　井上源之丞　下谷區二長町一
印刷所　凸版印刷株式會社　下谷區二長町一
發行所　高山書院　神田區小川町二ノ一〇　電話神田(25)八一〇　振替東京八三八九三

山浦貫一著

森恪（普及版）

菊判 頁
函入クロース美裝
定價五圓
送料四十五錢

東亞の先驅森恪！この先見、此の達識！今や森恪先生を慕ふの聲全國に漲る、敢て特別廉價普及版を贈る所以である！

深刻な時代の相貌と加速度的なその動向を確把するは國民の義務だ

現代政治讀本三題、好評重版の書！

山浦貫一著
近衞時代の人物
〒定價一・七〇〇・一〇〇

岩淵辰雄著
重臣論
〒定價一・八〇〇・一〇〇

岩淵辰雄著
屑屋政談
〒定價二・〇〇〇・一〇〇

高山書院
東京・小川町二の一〇一
神田
電話神田一八一〇番
振替東京八三八九三

915
61

終